



ひろさわ ゆうこ
廣澤 裕子 さん（蒔田）

未来を担う若者たちの声で再び満たされる姿は、学校跡地の新たな可能性を感じました。

一般的に通信制高校と聞くと「映像授業を見て学習するだけ」と思わ

教育という形で 施設に新たな命を吹き込む

今回は、令和7年春に開校した広域通信制高等学校の四谷学院高等学校（以下「四谷学院」）の佐伯章副校長に話を伺いました。

少子化に伴い、全国各地で学校の統廃合が進んでいます。子どもたちが学び育った場所が役目を終えた後、利活用を模索している地域も少なくありません。筑西市でも令和5年に下館北中学校が閉校となりましたが、その後、新たな学びの場として再生されています。

学校跡地に新たな命を吹き込む 未来を育む学びの場へ



四谷学院高等学校
佐伯 副校長

れがちですが、四谷学院ではコース別に映像授業と対面授業の仕組みが整っています。また、今年から硬式野球部が本格始動し、生徒15人が寮生活を送りながら、甲子園出場を目指して日々の練習に励んでいます。

佐伯副校長は「閉校した学校が学びの場として息を吹き返すことは、地域の資産を教育目的で再生すること。一旦は役割を終えた施設に新たな命が吹き込まれ、再び生徒たちの声が響くことに大きな意義を感じています」と語ります。

新しく生まれ変わった校舎

校舎内を見学すると、下館北中学校時代の面影を残しながらも、理科室は食堂へ、技術室は大浴場へ、校



①

②

③

①校舎外観 ②室内練習場 ③グラウンド

地域とのつながりについて

「対面授業では市内食材を活用した調理実習、全国の生徒が本校に一同に集まるスクーリングでは市内で

舎南側教室は個室の寮へ改装され、かつての学び舎は、再び若者たちが生活し学ぶ空間へ生まれ変わっていました。また、体育館はアリーナ床面に人工芝を敷いた全天候型の室内練習場となり、2階にはトレーニングルームを整備。さらに屋外には水はけの良いグリーンサンドのグラウンドも整備されており、硬式野球部に力を入れている様子が伝わってきました。

四谷学院高等学校について

全国に31のキャンパスがあり、住んでいる地域にかかわらず入学できます。また、4つのコースから自分に合う学習スタイルを選択できます。



詳しくはこちら

硬式野球部について

学業との文武両道を目指す選手たちの今後の活躍にご注目ください。



詳しくはこちら

取材を終えて

体験学習を実施するなど、地域資源を活かした学びを取り入れています。また、硬式野球部の練習を地元の人が見学に訪れることもあり、今後は試合の応援などを通じて、地域との交流をさらに深めたいです」と地域連携について話します。

下館北中学校跡地は使われなくなった施設ではなく、地域に親しまれた校舎が、その面影を残したまま学校として再び息を吹き返し、新たな若者たちの学びの場となっています。少子化が進む中、学校跡地の利活用は多くの地域が抱える共通の課題です。四谷学院の事例は、教育という形で地域資源を再生し、新たな人の流れや交流を生み出す可能性を感じました。地域に親しまれた学び舎が新たな未来を育んでいく。その歩みをこれからも見守り、応援していきたいです。

【問】四谷学院高等学校

☎ 49・9711